

九州天皇家論 6章 倭建の歌

赤い満月

天の香具山

倭健には月経を歌った有名な歌がある。月経が歌われることがあるのか。故にこの歌は、古来、様々な解釈がなされてきた。作歌者は倭健なのか。あるいは、別人なのか。「月立ちにけり」という歌詞の「月」とは、「一月」という意味か。あるいは、天空の「月」か。いろんな論争がなされてきた。こうした経過から考えて、この歌は私たちの古代認識を検証する絶好の題材といえる。まず、歌とその前後の地の文を検討しよう。

…故、尾張國に到りて、尾張国造の祖、美夜受比売の家に入り座しき。乃ち婚ひせむと思ほししかども、亦還り上らむ時に婚ひせむと思ほして、期り定めて東の國に幸でまして、悉に山河の荒ぶる神、及伏はぬ人等を言向け和平したまひき。……

其の國(甲斐国)より科野国に越えて、乃ち科野の坂の神を言向けて、尾張國に還り来て、先の日に期りたまひし美夜受比売の許に入り座しき。是に大御食献けり時、其の美夜受比売、大御酒盞を捧げて献りき。爾に美夜受比売、其れ意須比の裾に、月経著きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る久毘 弱細 手弱腕を 枕かむ
我はすれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答えて曰ひしく

高光る 日の御子 やすみし 我が大君 あらたまの 年が 来経れば
あらたまの月は来経往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に
月立たなむよ

といひき。故爾に御合(みあひ)したまひて、其の御刀(みはかし)の草那藝剣を、其の美夜受比売の許に置きて、伊服岐能(いぶきの)山の神を取りに幸行でましき。(古事記中巻)

倭建が歌を歌うことになったきっかけが地の文に書かれている。

爾に美夜受比売、其れ意須比の裾に、月経著きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく

ここには「美夜受比売(みやすひめ)」の「意須比(襲)」の裾に月経がついた。それで倭健は歌を詠んだと明確に記している。倭健は月経血を見て、歌を詠んだ。歌を詠んだ倭健の気持ちは歌の中に表れている。倭健は長い戦の旅から「美夜受比売」の家に帰ってきた。

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る久毘 弱細 手弱腕を 枕かむ
我はすれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

「久方の香具山」に、鋭い鎌のような隊形をなして、“首”が渡っていく。その鳥の首のようなお前のか弱い腕を、か細い腕を、枕にして一緒に寝たいと私は願うけれど、と倭健は心情を正直に吐露している。長旅から帰ってきてやっとお前を抱ける。その男の思いに水を差したのが月経血であった。

前半部は叙景の句である。「天の香具山」、「利鎌の隊形で飛んでいく久毘」は実景である。倭建は今、「美夜受比売」の家にいる。その家から「天の香具山」が見える。その「香具山」に向かって飛んでいく「久毘」を見ている。「久毘」は雁であろう。雁の細い首から、女の細い腕を連想する。その腕の中で眠りたい。

- (1) 作歌者は倭建である。
- (2) 作歌場所は「尾張國」にある「美夜受比売」の家である。
- (3) 「天の香具山」は実景である。

以上、三点はこの歌を解釈する時、曲げてはならない。いかに“不合理”と映ろうと、これらの事項を曲げて歌を読むべきではない。「尾張國」にある「天の香具山」の近くに住んでいる「美夜受比売」の家を訪ねた倭建の歌である。この“理”を通して、歌を解釈していこう。

歌の解釈

爾に美夜受比売、其れ意須比の裾に、月経著きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る久毘 弱細 手弱腕を 枕かむ 我はすれど
さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答えて曰ひしく

高光る 日の御子 やすみし 我が大君 あらたまの 年が 来経れば あらたまの
月は来経往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ

月立ちにけり

「月がたつ」には、通常、二つの解釈がある。

- (1) 「月」が経過した。
この場合の「月」は「month」である。謂わば観念である。この場合「月が経過してしまった」、「時が過ぎてしまった」という時間の意味である。
- (2) 「月」が昇った。
この解釈では「月」は実際の月「moon」である。この場合は「月が昇った」という意味である。

果たして、どちらの意味で倭健は詠ったのか。「美夜受比売」も同じく「月」を詠っている。

月は来経往く

この「月」はどうか。この「月」は分かりやすい。「美夜受比売」は、「あらたまの年が 来経れば あらたまの月は来経往く」と、詠った。「新しい年が来れば、新しい月は来経往く」。「来経往く」は、「きへゆく」と訓む。「きへゆく」とは、「消えゆく」である。これは天空の「月」の新月から満月への運行の姿である。

「新しい年が来れば、新しい月も消える」とは、現代の太陽暦では分かりにくい言い回しである。だが、倭健の時代は太陰暦である。新月から満月までの15日を一年と考えていた遠い昔の時代の一年の観念を基にした言い方であろう。

「美夜受比売」の歌にある「月」は、「来経往く月」、つまり、天空の満ち欠けする「月」である。時間を表す「一月（ひとつき）」、「二月（ふたつき）」と云った「月」ではない。「時間がたつ」とはいうが、「時間が消えゆく」とは言

わない。

では、倭健が「汝が著せる 襲^なの裾^けに 月立ちにけり」と詠った「月」はどうか。やはり、天空の「月」である。つまり、「襲の裾に月が昇ってしまった」という意味である。この歌詞を「襲の裾に、一月が経過してしまった」と解釈するわけにはいかない。倭健が、「美夜受比売の家で月立ちにけり」と詠っているのであれば、「美夜受比売の家で長い月日をすごしたなあ」と解釈できないことはない。だが、この歌は、「襲^{おすひ}の裾^{すそ}に 月立ちにけり」である。「月」が昇ったのは上着の服の裾である。

だが、普通、「空に月が昇った」とは云っても、「襲の裾に月が昇った」とは云わない。上着の裾に月が昇るだろうか。そんなわけない。

倭健が、今、見ているのは、「美夜受比売」の「襲」である。「襲の裾に月が立ちにけり」とは、「襲の裾に月が昇ってしまった」という意味である。解釈が難しいが、これは比喻である。倭健の作歌状況を考慮すれば、比喻の意味は明白である。「其れ意須比の裾に、月経著きたりき」と、その状況を書いている。この状況を比喻で表したのである。

女は真っ白い「襲」を着ている。その裾に、赤い月経血が、ぽつんと、付いている。まるで、小さな赤い月が昇ったように見える。倭建は、月経血を赤い満月に見立てて、「月が昇ってしまった」と言い表したのである。

この機転によって、この歌は楽しく、且つ、美しいものになった。

我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ

この「月」もmoonである。さて、この、「月立たなむよ」の解釈が難しい。文法的には「なむ」は「願望」の「なむ」であろう。その意味で言えば、「月が立って(昇って)ほしい」と、いうことになる。しかし、その意味では歌が繋がらない。倭建と「美夜受比売女」の問答歌であるから、倭建が「月が昇ったよ」と歌ったに対して、「月が昇ってほしい」では答えとなっていない。

(1) 古事記(日本文学大系)・頭注4

「新月が出るでありますよ(月経の血もつきましようよ)。さてこの歌は、大神宮縁起には「やすみしし わご大君 高光る 日の御子 あらたまの 来経往く年を 年久に 御子待ちがたに 月累ね 君待ちがたに 諾な諾なしもや 我が著せる 襲の上に 朝月の如く 月立ちにける」とある

「なむ」を「推量」と見ている。従って「新月が出るでありますよ(月経の血もつきましようよ)」と解釈している。だが、この解釈もピンと来ない。現実には「月はずでに昇ってしまっている」のであるから、「推量」では返答とならない。「大神宮縁起」では「月立ちにける」と詠っている。「月が昇ってしまいました」という「完了」である。この表現であれば倭建への返歌となっている。

(2) 古代歌謡集(日本文学大系)の頭注28

「月立たなむよー「月立つ」は月水の着く意と、月が新たになる意を懸けてある。「月立たなむよ」は、月が「立ちあらむよ」の意

◎ 倭建の命が、せっかく来たのに「月立ちにけり」(月水が着いている)と言ったのに対して、長い間おいでにならないので、待ちきれないで、「月が立っている」(月が改まった→月水が着いた)のはあたりまえでしょうよ、とやり返したのである。

同・補注28では

ナムは願望の助詞とは解しえない。そこで契沖、宣長を始め「月立ちなむよ」と同じ意味で、「古へはタチナムの意にかくも言ひけるなるべし」(記伝)と言っているが、説明不十分。これは倭建に命が「月立ちにけり」と言ったのに答えて、あなたを待ちかねて月が立っているのでしょう、と言っているの、完了又は継続的存在の意をあるとしなければならぬ。...

古代歌謡集・頭注の解釈では「月が立っている」という意である。補注28では「あなたを待ちかねて月が立っているのしょう」という意となる。このどちらでもほぼ意味は通じる。

「美夜受比売」は「君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ」と、詠っている。「あなたを待ちかねて」、その結果、「月立たなむよ」と、因果関係を詠っている。「月が昇ったのは、あなたを待ちかねたからです」と、やり返したと読むのが正解であろう。男女のきわどい話を、うまくたとえて詠ったものである。

ひさかたの 天の香具山

この「天の香具山」は九州天皇家の名山、「天の香具山」である。神武天皇が「畝傍の山」と云った香春町の香春一の岳である。

倭健は遠征から九州天皇家の都（香春・田川）に戻ってきた。そして、田川市に存在した九州天皇家の「尾張國」の「美夜受比売」の家に立ち寄った。その家からは香春岳が見えた。「美夜受比売」は、「今度、帰った時に契りを結ぼう」と、約束をして遠征に出て行った倭健を、今か今かと待っていた。長い間、待ったがなかなか倭健は帰ってこない。ところが、倭健が帰ってきた。うれしくてたまらない。うれしさのあまりかどうか、生理となってしまう。月経血が白い「襲」についてしまった。倭健にめざとく見つけられて歌われてしまった。

まあ、あなたが帰ってくるのを、今日か明日かと待っていましたわ。でも、あまりにも長く待っていたので、あなたを待ちかねて、月が昇ってしまいましたわ。

でも、この返歌は、「承諾」の歌でした。よって、地の文は「故爾に御合（みあひ）したまひて」と記している。

爾に美夜受比売、其れ意須比の裾に、月経著きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく
ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る久毘 弱細 手弱腕を 枕かむ 我はすれど
さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

遠くに見える天の香具山 鎌の体形で渡っていく久毘のように 細い腕を枕にして、さあ寝よう
と思うけれど、あなたが着ている 襲 の裾に満月が昇ってしまいました

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答えて曰ひしく
高光る 日の御子 やすみし 我が大君 あらたまの 年が 来経れば あらたまの
月は来経往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ

高く光る 日の御子 國を統治されるわが大君 新しい年となれば 新しく月は消えゆきます。分かっています。分かっています。あなたがお忙しいのはよくよく分かっております。でも、あなたが帰ってこられるのを待ちかねて、私の着ている 襲 の裾に満月が昇ってしまったのですわ。



九州天皇家
天の香具山
(香春岳)

万葉2番歌 「天の香具山」

国見で有名な歌が万葉2番歌である。その中に「天の香具山」が歌われている。作歌者は高市岡本宮の天皇である。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ
海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ あきつ島 大和の国は

この「大和」は奈良ではない。奈良・明日香の香具山からは海原は絶対見えない。葛城山脈が邪魔をする。では葛城山頂からはどうか。ロープウェイで登って見よう。ここからも海原は全く見えない。故に、或る人は「海原」を池と解釈している。しかし、海は海、池は池である。海に囲まれた日本人が海と池を間違えることはない。大阪湾を見て「大きな池やな、」と思う人はいない。また奈良の猿沢の池を見て「小さな海やな」と云う人もいない。

万葉2番歌の作歌場所は奈良ではない。すでに多くの人が疑問を投げかけている。では作歌場所はどこか。これがまた一定しない。

とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば

高市岡本宮の天皇は「とりよろふ天香具山」と詠っている。「とりよろふ」の意味がなかなかの問題で、これが正解というのがない。何故か。「天香具山」を奈良の「香具山」と理解しているからである。奈良の「香具山」を見て「とりよろふ」をイメージしても適当なものはない。歌に歌われた「天の香具山」は香春町の香春岳一ノ岳である。詠われた「天の香具山」は九州天皇家の「天の香具山」である。

「とりよろふ」とはどんな意味か。香春町の香春岳は「とりよろふ」山である。「よろふ」は「寄る」の意である。「近づいて一カ所に集まっている」という普通の意味である。香春町の香春岳は三つの山（一の岳・二の岳・三の岳）が一カ所に寄り集まっている。この姿を「とりよろふ天の香具山」と詠ったのである。

この山はまた「畑の畝」の形にも見える。神武天皇はこの山を「畝傍の山」と呼んだ。だが、神武が「畝傍の山」と名付けたのではない。神武以前から「畝の山」と呼ばれてきた。五木寛之氏は「青春の門」で「香春岳は異様な山である」と書き始めている。確かに、五百mほどの三つの山が並んでいる姿は異様である。

国原は 煙立ち立つ

この句は仁徳天皇の国見の故事を前提にしているのであろう。人々の生活は豊かになったことを暗示している。この國とは、田川市である。

海原は 鷗立ち立つ

果たして香春一の岳から海が本当に見えるか。土地の人に聞いたところでは、「見えたでしょう。」と答えが返ってきた。では、高市岡本宮の天皇が見た海とはどの海か。香春一ノ岳から行橋市の海が見えた。周防灘である。高市岡本宮天皇は、西に田川市を見て、東に周防灘の海を見た。

私たちは、現在、もうこの山に登ることはできない。九州天皇家の都の名山、数々の歌に詠われた「天の香具山」は上半分を削り取られた無残な姿となっている。

あきつ島

神武天皇は香春町・田川市に都を拓いた。晩年、巡幸して国見をした。その時、当時、「稻佐の山」と呼ばれていた小倉南区の要害（長野城趾）に登り、国見をした。眼下に広がる竹馬川を見て「蜻蛉のとなめ」という感想を述べる。この感想によって小倉南区は「秋津島」と呼ばれるようになった。

高市岡本宮の天皇が国見をしたのは小倉南区ではない。香春岳に登って国見をしたのは田川市である。したがって、「あきつ島」と詠ったのは神武天皇の語法とは異なる。しかし、香春岳からみた田川市は神武天皇家の國である。神武天皇家の國は「秋津島」と呼ばれた。その伝統に従い、田川市を見て、「秋津島」と詠ったのであろう。特に問題はない。「小倉南区」も「香春町・田川市」も共に九州天皇家が統治する代表國である。

高市岡本宮の天皇は、神武の言葉を自分の歌に取り込み、自分と神武と一体化させている。「神武の國、秋

津島を継承したのはこの私である」と、宣言しているのである。この王位継承宣言が國見であり、國見の歌である。

大和(山常)には 群山あれど

歌の中の「大和」は、原文では「山常」である。訓は「やまと」である。この「山常」は奈良ではない。作歌場所は奈良香具山ではなく、香春一の岳である。天皇は香春一の岳に登って、「山常には 群山あれど」と詠った。「群山」とは単独で存在する山ではなく、連山という意味である。

國見をすれば

国とは、当然、自分が統治する国である。天皇は旅人ではない。天皇はこの國に住み、この國を統治する王として、國見をしたのである。高市岡本宮の天皇は九州天皇家の天皇として統治する「山常」の「天の香具山」に登って國見をした。

